

の大野駅西口から外に出ると、一面の工事現場が広がっていた。大型重機が植音を響かせ、忙しく工事にいそむ人の姿も見られる。

大野駅があるのは、福島県双葉郡大熊町。2011年の東日本大震災での福島第一原子力発電所事故により全町避難となった後、2019年5月に町役場が開庁。翌月に町営住宅の入居が開始。2021年には商業施設などがオープン。現在工事が進む駅の西側では、今後商業施設や産業交流施設の整備が予定されるなど、復興への歩みが少しずつ前へと進んでいる。

○ハード・ソフト両面でまちを支援
駅から、工事現場を貫く通りを歩いて約5分。未だ周囲に建物のない中に現われたのが「KUMA・PRE（クマプレ）」だ。明るい日ざしが差し込む室内には、ミーティングな

設立に尽力し、現在も代表を務めている。
そして、その活動のなかから、2023年10月に誕生したのが、「株式会社KUMA・PRE」だ。代表取締役は、和歌山大学4年生の原口拓也さん。今年1月に大熊町に移住し、慶應大学3年生の阿部翔太郎さんとともに、大熊町でのキウイ栽培に取り組んでいる。

「大学2年生のときにコロナ禍で授業がお休みになり、地元の和歌山でみかん農家のバイトをしたのが、農業、特に果樹栽培に興味をもつきっかけになりました。就農場所を探して全国の農家での修行行脚中に、知人に誘われて大熊町主催のアイデアソン・コンテストに参加。それを機に『おおくまキウイ再生クラブ』に加わるようになりまして。そこで、町のアイデンティティであるキウイ栽培

をめぐって、産業界、行政、市民、事業者が連携し、まちを元気にしようという思いが込められています。大熊町の復興を応援し、まちを元気にしようという思いが込められています。大熊町の復興を応援し、まちを元気にしようという思いが込められています。



阿部民子 text by Tamiko Abe
Illustration by Shigeyuki Sakata

どができる大きなテーブルや地域情報の掲示。商業施設が乏しいまちのオアシス的な存在になっている。
「ここは、2022年2月にオープンした地域活動拠点です。大熊町を訪れた人がふらっと立ち寄りたり、まちの情報を知るなど、大熊町の窓口としての機能を担っています。また、大野駅西交流エリアの開業の試行の場として、大熊町でチャレンジしてみたい方への場の提供も行っていきます」と話すのは、クマプレの運営主体であるUR都市機構の島田優一だ。

まちの特産品、キウイ再生を軸に人が訪れ、集い、交流できるまちに

福島県双葉郡 大熊町
地域再生支援
大学生が特産品で起業 2023年●令和5年～

東日本大震災以来、URは津波被災地や原子力災害被災地での復興支援に取り組んできた。大熊町でも、

が消滅の危機にあると知り、ここでキウイを育てたい!と思うようになりました」と原口さん。

一方の阿部さんは、もともと報道記者志望だったという。

「大学のサークル活動で取材に来たのが、大熊町と繋がるきっかけでした。もともと自然災害や原発事故には関心が深かったのですが、発信をしてもなかなか届かない。そんななか『おおくまキウイ再生クラブ』の活動に参加。キウイ栽培を通して地域に根ざした農業を途切れさせたくない、そして町の人が懐かしいと思うキウイ畑の風景を取り戻せたら、というのが原動力になりました」

案内された圃場は2・5ヘクタール。今年は1ヘクタールに540本のキウイ苗を植えるという。取材当日は、苗を植える穴を手掘り中。重労働だが、作業する様子はサークル活動のように明るく楽しげだ。

「キウイは果実の収穫までに3年かかり、1、2年は赤字覚悟です。それでも、株式会社でやろうと決めたのは、大熊町の特産品にして、産業

土地の基盤整備をはじめ、役場新庁舎などの建築物整備事業支援など、ハード面での支援を続けている。その一方で取り組んでいるのが、まちのコミュニケーションづくりや、地域活動の担い手を見いだすなどのソフト面での支援だ。クマプレは、まさにその活動の中心基地。キッチンカーを使った飲食需要の実証実験や、クラフトづくりのワークショップなどを開催。町内外の多様なプレイヤーなどと連携しながら、地域の活性化やコミュニケーションづくりを図っている。

○大熊町の特産品復活を目指して

「クマプレ」の運営とともに、URが行ってきたのが、「おおくまキウイ再生クラブ」の活動支援だ。かつて梨とキウイの名産地だった大熊町は、原発事故により果樹の全てを抜根、表土も削られてしまった。「おおくまキウイ再生クラブ」は、その地で再びキウイを栽培し、コミュニティと交流を創出したいと2019年に町民や役場職員など有志で結成。UR島田の前任者、栗城英雄が

として成り立たせたいから。将来は、キウイをきっかけに大熊に来てもらう人や新規就農者を増やせれば」と原口さん。

島田らUR職員も、日常的なサポートのほか、首都圏でイベントを催したり、知人を呼んでの圃場の手伝いなど、影になり日向になり支援を続けている。

「大熊町には、熱い思いを持つ人が集まり、みんなで助け合っていて、それぞれを応援する雰囲気とチャレンジできる環境がある」との島田の言葉に、「URさんがソフト支援をするのが驚きだったし、仕事の枠組み以上に個人として応援してくださるのもうれしい。大熊町はまち中すべてが仲間で、ここでの生活が楽しい」と阿部さん。

希望に満ちた若者の手で、新たにこの地に植えられるキウイ。3年後のたわわに実る果実と、まちの未来を楽しみに待ちたい。



右/キウイ畑で作業する大学生2人
左/大熊町の交流スペースとなったクマプレ